

20. 涙嚢炎として診断・加療されていた鼻腔内腫瘍

獨協医科大学越谷病院眼科

仙田 翠, 井出智之, 阮 俊栄, 鈴木利根,
筑田 眞

【緒言】我々は、近医で涙嚢炎と診断されたが、精査により鼻腔および副鼻腔由来の悪性腫瘍と考えられた2例を経験したので報告する。

【症例1】症例1は66歳の女性で右涙嚢部無痛性腫脹を主訴として紹介受診した。腫瘍の性質は辺縁整で平滑、圧痛なく皮膚の発赤を僅かに認めるのみであった。涙嚢洗浄を施行するも不通で排膿せず、抗生剤の点滴を投与しても変化を認めなかったため、CTを施行した。CT所見にて右鼻腔原発を疑う腫瘍性病変を認めたため、生検を施行したところ diffuse large B cell lymphoma と診断された。現在は血液内科にて化学療法中である。

【症例2】症例2は80歳の女性で流涙と右鼻側下眼瞼腫脹を主訴として紹介受診した。腫瘍の性質は可動性なく圧痛もなし、皮膚の発赤を僅かに認めるのみであった。涙嚢洗浄を施行するも不通で排膿を認めず、抗生剤の点滴を投与したが腫瘍は増大し皮膚の発赤の増悪、圧痛を認め始めた。そのため腫瘍を疑いCTを施行したところ腫瘍性病変を認めた。生検を施行したところ diffuse large B cell lymphoma と診断された。現在は放射線療法と血液内科にて化学療法を併用中である。

【まとめ】2症例ともに初診時は無痛性腫瘍で、経過とともに圧痛を認めたものもあった。涙嚢洗浄はともに不通で、膿の逆流や血性逆流物も認めなかった。2例とも早急に治療を開始することができたため経過は良好であった。

【考按】今回、我々は鼻腔由来で涙嚢部を圧迫し、涙嚢炎症状をきたした稀な2例を経験した。

涙嚢部の無痛性腫瘍を診た場合、涙嚢炎だけでなく常に悪性病変による腫瘍の可能性も念頭に置いてCT、MRI等での検索を行う必要があると考えられた。

21. 46 XX male の分子生物学的検討

獨協医大越谷病院泌尿器科

太田茂之, 定岡侑子, 佐藤 両, 西尾浩二郎,
川口真琴, 小堀善友, 芦沢好夫, 八木 宏,
宋 成浩, 新井 学, 岡田 弘

【目的】46, XX male とは、核型が46, XXであるにも関わらず性腺は精巣であり表現型は男性であるもので、1964年に de la Chappelle らにより報告された。出生男児20000人に1例ほどにみられ、男性不妊外来患者の0.1-0.5%、無精子症患者の0.5%を占める。46, XX male について、SRY, SOX9 を中心に分子生物学的検討を行うことを目的とした。

【方法】獨協医科大学越谷病院泌尿器科不妊外来を受診した患者のうち、染色体分析で46, XX と判明した5例について、内分泌学的検査、MD-TESE 施行時の精巣組織から RT-PCR にて SOX9, DAX-1, Ad4BP/SF-1 を、FISH にて SRY, 末梢血リンパ球から PCR にて SRY, DYZ1, DYZ3, DAZ を調べた。

【結果】SRY を認めないにも関わらず SOX9 の発現が上昇していた2例で精細管を認めた。

一方、Sertoli cell のみを認め精細管を認めなかった2例については SRY を認めたが SOX9 の発現は上昇していなかった。5例とも MD-TESE を行ったが、どの症例も精子は採取できなかった。

【考察】SRY を含む Y 染色体に Sertoli cell 発生に関する遺伝子が存在する可能性がある。SRY を認めない46, XX 患者で精巣を発現させたのは SOX9 の up regulation によると考えられる。

【結論】男性不妊を主訴として来院した46, XX male 患者5例について、内分泌学的検討と Y 染色体上の SRY を中心とした STS (Sequence-tagged Sites) の検索を行った。SRY と SOX9 の間に Sertoli cell や精細管を発生させる遺伝子がある可能性が示唆される。